日・仏首脳の年頭記者会見評

一月四日、たまたま福田首相の年頭記者会見をテレビで見た。「生活者・消費者を主役にする政治に転換」とか言っている！　昨夏参院選で「構造改革」を自民党と競う路線から転換、「生活第一」とか唱えた小沢一郎にあやかろうというわけか。

「何を言うか！」と今年最初の怒りを持たされた。翌日の「東京」一面コラム「筆洗」――「やはり従来、生活者・消費者は政治や行政の主役ではなかったのだ。首相の言葉ではっきりした」。

自公政権幹部の一人であるのに、従来の大会社・富者優先の新自由主義政治を福田は自己批判しなかった。

そんなこんなで怒りが収まらないところに、フランスの友人マルク・モーリス（この人については「かながわ総研所報　〇六年二月号」の拙稿「現代フランス三題噺」参照）からのメールが九日にあった。

「昨日、サルコジの記者会見を観た。二時間、明らかに長過ぎだ。フランス社会の全領域を変革すると自称する野心家だ。彼は著名な左翼の社会学者エガール・モランから借りた『文明の政治』という表現定式を大学、保健、文化等々あらゆる領域に繋げようとした。フランス人がまっ先に関心をよせている、特に最底辺貧困層で低下している購買力問題は無視だ。……以上、今日のフランス人の日常的現実を隠蔽したこの長過ぎのお喋りを聞かされた僕の怒りです。

この『目くらまし』について、君は日本から見てどう思う？」

僕の返事――「『変える』の言葉は、……右翼的大衆迎合主義の道具としてよく使われる。サルコジは奥さんを変えるのにうまく成功した。しかし、フランス人民の闘争の社会的獲得物を右翼的に変えることが決して彼にはできないだろうことを僕は強く願う。」

マルクの返事――「完全に君に同意！……フランスの大闘争によって獲得された社会的成果がいまサルコジ政府によって脅かされている。その政策に対抗するため全左翼が統一できるか。僕はできると願っている。」

下山　房雄

（海老名在住）